

岩永てるみ・阪野智啓・高岸輝・小島道裕編

『「月次祭礼図屏風」の復元と研究』印刷ミスについて

『「月次祭礼図屏風」の復元と研究』
の出荷されたものの一部に印刷ミ
スがございました。85頁の赤字で
囲った部分の印刷がかすれ、関係
のない文字が印刷されています。

お手持ちの書籍が該当される方は、
思文閣出版

TEL (075-533-6860)

FAX (075-531-0009)

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

までご連絡くださいませ。

正しい商品と交換させていただきます。

ただし、勝手ながら交換期限は

2021年6月末日といたします。

この度は大変ご迷惑をおかけしま
した。

今後とも何卒よろしく願いしま
す。

思文閣出版

(三) 原本の誤差修正

模本画像データを原寸大に印刷し検証した結果、特に第一扇と第二扇、第二扇と第三扇を跨いで描かれる建物の描写に大きなズレがあることが確認された。同様に山の形や雲霞の位置も合わない。また第四、五扇と第五、六扇を跨ぐ部分では樹木や河川もずれる。なかでも建物描写と山のズレは画面全体の印象を大きく損ねるため、模本の写し崩れと判断して部分的に修正を加えている(一七二頁)。

まず大きなズレがあるのが、第一扇と第二扇を跨ぐ幕府の描写である。第一扇中央の檜皮屋根と、第二扇の当接部分の檜皮屋根は、築地庵の位置とも合わず大きくずれる。また第二扇とは雲霞と山の位置も合わない。画像全体の上下の位置をずらして接続の良い位置取りをいろいろと探ってみたが、すべての辻褄が合うところはなかった。そこで、模本線寸法の合致する位置でそのまま接続させた場合にズレが生じる部分を、個別に修正することとした。そうすると中央の檜皮屋根のズレが最も顕著となるので、絵に影響の出ない中央付近の大きな雲霞部分の縦幅を延長し、さらに檜皮屋根付近から上部全体をやや右側にずらすと、第二扇の建物と山との接続が良くなる(資料二)。

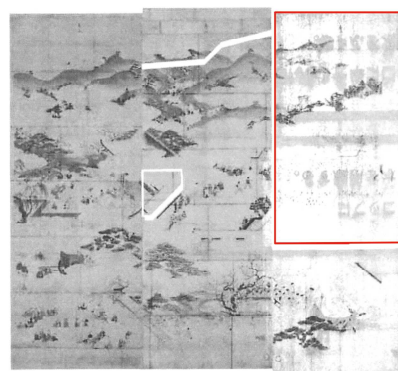
このように模本の寸法通りに接続させると、第二扇と第三扇でも、両扇を跨ぐ大きな御殿の檜皮屋根の修正が必要となる。屋根だけでなく画面の上方の自然景や、下方にある築地庵と門もそれぞれ接続とやや問題があるが、第一、二扇ののと同じようにいう訳で中央にある檜皮屋根の方がより大きくずれている。特に扉を跨ぐ軒と破風がまったく合わない。苦肉の策として、第二扇側の屋根と上部雲霞部分を数センチ上げることが検討された。すると御殿においては御殿と部戸が若干知くなるが、屋根の違和感はなく、第二扇側の檜皮屋根の大きさが模本と変わってしまうが、大きな建物なだけに、より目立つ屋根のズレの修正を優先した(資料三)。

原本を写すときにこのようなズレが起きる原因を想像すると、もし原本に直接紙を当てて書き写した方法を探っていた場合、写しているうちに模写側の紙がずれてしまうことは起こり得る。あるいは原本に模写紙を重ねない臨写であるならば画像に誤差が出るのはなおさらで、この程度のズレならばむしろ相当正確に写している方だろう。また前述のように寸法を整理した結果、模本各扇によって紙幅が一致しておらず、設定寸法の方が長い場面もあって端に描写が足りない部分が出てきた。寸法整理で生じた空白部分は、適宜描写を加筆して違和感をなくしている。

二 みがきつけの雲霞

(二) みがきつけと雲母地

室町時代のやまと絵屏風の技法的な特徴として、画面全体に雲母を塗布し、さらに金、銀の切箔によって装飾する「みがきつけ」の技法があげられる。主な作例は東博本『浜松図屏風』(東京国立博物館蔵、参考図版10)のほか、藤原光重筆の伝承のある個人蔵『浜松図屏風』(同一)、四季花木図屏風(出光美術館蔵、同二)、日月山水図屏風(右隻、東京国立博物館蔵、同三)、御物本『歴國屏風』(宮内庁蔵)などがある。模本もこれらと同時代に制作されたことが想定されていることから、示された雲霞表現に



資料2.ズレの修正(第一～三扇)